

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年12月5日)

授業者：〇〇

範囲：多様な雇用のあり方

主な感想・代案

- おそらく、「現場的な安定感(?)」を目指そうとしているのかと思います。その感じが伝わってきます。また、資料を作りこんでいることも分かりました。
 - 〇〇君も念頭に置いている通り、職業や労働の話は、生徒自身の人生とも密接にかかわってくるテーマです。その点が学習の起爆材ともなりうると思う。「社会科らしい」授業をするのであれば、そういった自分の人生を射程にいった切実性と、社会問題や社会構造のようなマクロな話を行き来できるような授業が良いような気がします。
 - そういう観点から見ると、この授業は自分の人生を射程に入れている授業だと思うのですが、それにしても、将来の働く職業へのリアリティをわかせる場面が少なかったような気がします。個人的には、どういう働き方になるのかというのは、職業の種類に大きく依存するところが大きいと思うので、生徒がどういう職業になりたいかによって職場環境も変わってくるような気がします。厳密な意味で、アメリカ型と日本型の労働形態を二分することは困難ですし、多くの働き方が両方が混じっていると思います。ただ、自分がなりたい職業が、どちらの傾向性を持っているかを知ることは可能だと思います。何らかの形で、そういったなりたい職業とその職業の傾向性のようなものを導きだせると、この授業が、生徒の将来にとって現実的なものへと繋がるように私が思います。
- 例えば私なら、まず職業を選ばせるかもしれません。事前にアンケートでも取っておくと理想ですが、難しいければ、選択肢の中から、選んでもらう。全部カバーするのは困難ですが、例えば・・

医療、心理・福祉・リハビリ、美容・ファッション、旅行・ホテル、飲食、販売、教育・研究・保育、自然・動物、出版・報道、テレビ・映画、音楽・ラジオ、芸能・ネット、スポーツ、マンガ・アニメ・ゲーム、デザイン・広告・アート、IT・Web、法律・士業・政治、公務員、金融・コンサル系、国際、建築・インテリア・不動産、事務、オフィス、企業、運輸・輸送、
--

これだけ並ぶだけでも、業種によって、あきらかに実態が違いそうなことは予想できます。

- あらかじめ選択肢に対応した、一般的な状況をまとめた資料を用意してもいいし、タブレット端末などで調べてもらってもよいかもしれません。生徒のなりたい職業が「安定 or やりがい」の天秤のどちらを優先したものかを考えさせたうえで、細かい労働条件などが調べられると理想です。
- 授業の後半では、自分がなりたい職業がなぜそういう状況になるのか、自分はその状況をよいと思うか、悪いと思うか。どうすべきだと思うか。などを聞いていくような展開にすると、個人と社会の視点が行き来するような授業になっていくのではないかと思います。
- この授業で「関心」の評価をどう想定しているのかについて、少し疑問がわきました。個人的にはこの授業は非常に生徒一人ひとりの人生と密接にかかわる問題なので、いかに「自分ごと」として問題を捉えているのかという点は、関心意欲態度の範疇に入ると思います。

【コラム】理論と実践の接点

社会科においても自分の生き方を考える授業は大いにあり得ます。棚橋(2007)では、「社会の構造から自らの生き方を考えさせる授業」と題して、社会保障制度と働く仕事の関わりについての授業を紹介しています。当然、自分自身の現実の社会的状況に近づく分、切実な感じにはなるのですが、その際に重要となるのが、「自らの生き方の選択を通して、社会のあり方を批判的に分析する」プロセスです。この点が抜けるか否かで、授業の意味あいはかなり変わってきます。

【参考文献】棚橋健治(2007)『社会科の授業診断—良い授業に潜む危うさ—』明治図書